論文の内容の要旨

論文題目：　「祝祭性・物語性・公共性
——ハンナ・アーレントにおける「政治」の両義性——」

氏名　　：　　石田 雅樹（日本学術振興会特別研究員）

本論文は、政治哲学者ハンナ・アーレントの思想の内実を、「祝祭性」「物語性」の視点からその「公共性」の枠組みを再構成し、現代的文脈におけるその意義を明らかにしたものである。「祝祭性」とは、アーレントにおけるその「実存主義」モメントの有する政治性、すなわち、断絶した他者とのあいだに共同性を構築する契機を指しており、「物語性」とは、アーレントのテクストにおける特異な叙述構成が、過去と現在との新たな共同性を指向するものであることを指示している。本論文は、これまで様々な観点から行われてきた先行研究を踏まえながらも、この「祝祭性」「物語性」という新たな概念枠組を提示することにより、アーレントの語る「公共性」の意義を再考し、そこからアーレントの「政治」を巡る一連の議論が、本来的に両義性を孕むものとして、つまり、共同性の可能性と不可能性との〈あいだ〉を巡るものとして展開されていることを論証するものである。

このような形で再構成されたアーレントの「公共性」に関する考察は、より具体的には、各章で取り上げた以下のテーマ群において展開されている。

第 1 章「ワイマールにおけるハンナ・アーレント——戦間期ドイツの知的言説とアーレントの思想形成」では、全体の導入部として、ワイマール・ドイツにおけるアーレントの思想の位置を検証している。ここでは、当時の学知の状況を視野に入れながら、アーレントがマルティン・ハイデガーやカール・ヤスパース等の実存哲学に関心を示していった過

程と、それがその後の政治思想に接続されて行く過程が論じられている。

第 2 章「ニヒリズム・ユートピアニズム・全体主義」では、アーレントの全体主義論を、ユートピアニズムとニヒリズムという視点から読み解き、全体主義が提示する大きな「物語性」の魅力に関して考察している。ここでは、「全体主義」という政治運動の教義（大きな物語）が、世界を「客観的に」意味づける公理（人種論、階級社会論）に基づいて、秩序を創出しようとすること、またそれが「確実性への欲望」に囚われた大衆社会において抗しがたい「魅力」を持つことへのアーレントの言及の意味を検証している。

この全体主義の「物語性」という問題は、第 3 章「政治と祝祭（1）―― ルソー、ハイデガーと、アーレントにおける祝祭的公共空間」において「祝祭性」の問題と交錯することになる。この章では、ジャン＝ジャック・ルソーの演劇論とハイデガーの祝祭論を媒介にして、全体主義の「公的祝祭」に対して、アーレントの公的空間がどのような位置を占めるかが問題とされている。つまり、全体主義が、その「教義」たる壮大なテクスト（＝物語）を可視化・受肉化させる「祭儀」（＝祝祭）によって政治プログラム化されていること、またこの全体主義の政治的「祭儀」に照応するものが、ルソー、ハイデガーの言説に存在すること、そして、アーレントの言説がこれら二者と微妙な位置関係にあることが、ここで明らかにされている。

第 4 章「政治と祝祭（2）――代表（レプリゼンテーション）－再現前をめぐるアーレントとシュミットとの対話」では、前章の「祝祭性」の問題を引き継ぎながらも、それを、アーレントとカール・シュミットの「再現前 representation」概念と重ね合わせることで、前章の議論を発展させている。ここでは、両者が「代表制 representation」の喪失という現代政治の情況を意識しながらも、政治における「再現前」を思索し続けた点を、彼（女）らの革命論に焦点を当てることで明らかにしている。そして、このアーレントとシュミットにおける「再現前」への関心が、当時のワイマール・ドイツ知識人に共有された美学の政治的含意、とりわけ秩序・フォルムの解体を志向する「衝撃的恐怖の美学」の政治的危うさを念頭においたものであること、つまり、政治という営みがあくまで秩序というフォルムに携わる営為であることを踏まえ、政治フォルムを付与する「再現前」の美学に彼（女）らが固執したことが示されている。

第 5 章「「法」「権力」のドラマトゥルギー ―― アーレントと「革命」のアポリア」では、前章で取り上げられた「革命」論を掘り下げて、そこからアーレントの「法」と「権力」論を浮かび上がらせる試みが行われる。つまり、「革命」という現象が、既存の「法」と「権力」の再編成であること、またそうした再編成を遂行する行為こそがアーレントの

語る「活動」概念であることが明らかにされている。ここにおいて、アーレントの「政治」論と「法－権力」論との接合部分が提示され、それが「演劇」における「劇作法（ドラマトゥルギー）」あるいは「ゲーム」における「ルール」として捉え返すことができること、またそうした発想がアレクサンドル・P・ダントレーヴの政治論を経由してハーバート・L・A・ハートの法論、そしてルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタインの言語論に近接していることが示されている。

この「革命」という現象は、新たな時間の開始である点で「歴史性－物語性」の問題と密接な関係にあるが、第6章「破壊／救済としての〈歴史（ゲシ）－物語（ヒテ）〉」では、アーレントにおける歴史の問題を、その古代ギリシア解釈に焦点を当てながら考察している。ここでは、古代ギリシャ・ポリスを「政治」の引証点とするアーレントの言説、またそれに代表されるその歴史論が、歴史の「全体性」を排斥している点で、ヘーゲル－マルクス派の「歴史哲学」、そしてヴィルヘルム・ディルタイ等の「歴史主義」と一線を画し、また歴史事象の「客観性」に関心を払わない点でマックス・ヴェーバーの歴史社会学とも異なること、そして伝統的な歴史解釈の破壊によって過去を再生させようとするその方法論的姿勢は、ハイデガーの解釈学あるいはヴァルター・ベンヤミン的批評と通底していることが論証されている。

本稿は以上のような構成において、ワイマール・ドイツ以後、彼女に影響を与えた同時代のドイツ知識人（ハイデガー、ヤスパース、シュミット、ベンヤミン、ハバーマス etc.）との議論の同一性／差異を検証することで、「伝統の糸が切れた」ワイマール以後の世界におけるアーレントの政治思想の意義と特異性を浮き彫りにしようと試みるものであるが、またそれと同時に、伝統的な政治学におけるアーレントの政治思想の位置づけを測定することによって、そのオリジナリティを捉え返す作業も行われている。ハンナ・アーレントという思想家が、既存の「政治学」という学の枠組みを逸脱する存在であることは疑いないが、しかしながら、アーレントの議論を支える前提、すなわち、共同性を創出する「権力（パワー）」が、単なる「暴力（ヴァイオレンス）」とは異なること、あるいは、学としての政治学が、倫理や宗教的戒律とは異なる言語によって構成されねばならないこと、こうした認識は、アーレントの議論を待つまでもなく、「政治学」の古典的問題に他ならない。それゆえ本稿は、アーレントが既存政治学の学派の言語に拠らずに、実存哲学の理論枠組みにおいて、こうした政治学の根本問題をどのように構成し、またどのように対応したのか、そしてその対応がどのようにして新たな理論的視座を示すものであるかを、検証するものである。

本稿は、以上のような形で、「公共性」をめぐるアーレントの議論の特異性と、その今日的可能性を明らかにすることによって、従来のアーレント研究に見られる二つの傾向――専門用語（ジャーゴン）の内在的な解釈に終始するあまりにその現代的意義を見失うか、あるいは、現代

政治の諸問題に安易に翻訳するあまり、精緻な解釈がお座なりにされるという二つの陥穽――への根本的な批判を提示している。そしてさらにまた、「政治思想」の枠組みに収まりきらない多様な学知を横断するアーレントの言説を、政治学、哲学、社会学、歴史学、言語学、倫理学、美学といった学知の相関性の下に捉え返す点において、単なるアーレント研究の刷新という次元に留まらず、現代政治思想の新たな次元を切り開こうとするものに他ならない。